

「……はあ、可愛いなあ未衣花ちゃん」

テレビに映る愛らしいアイドルの
女の子を見て、僕はため息をついた。

「未衣花ちゃんを見てみると
仕事の疲れも吹き飛ぶな」

仕事で忙しい毎日の中で、
今日はつかの間の休日だ。

ということと、僕は唯一の癒しである
未衣花ちゃんのライブを観ていた。



「次のライブはホールが……」

未衣花ちゃん、どんどん人気になっていくな

本来であれば、僕のような

冴えない三十代のサラリーマンにとって

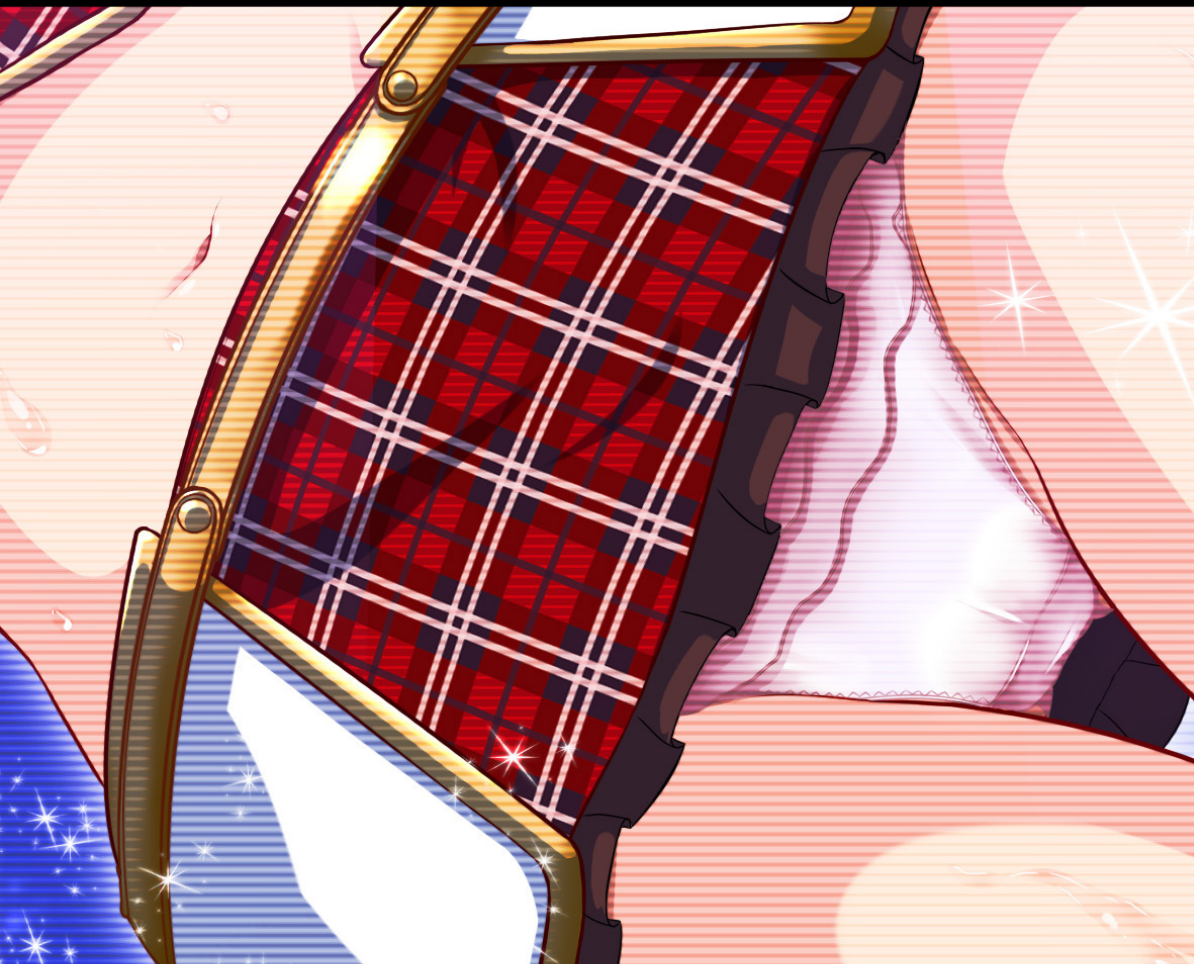
彼女は雲の上の存在。

まさにテレビの中だけの存在だろう。

でも、実は僕には一つの秘密がある。

それは……

ピンポーン



「おいしいちゃん？ マイカきたよー♪」

——それは、人気急上昇中のアイドル、
未衣花ちゃんがお隣さんだということだ。



「おにいちゃん、マイカがえつちで
気持ちよくしてあげるからね！」

「えっ……で、でも未衣花ちゃん」

「マイカに任せておいて！」

事務所のお友達に聞いてきたの……」

わくわく

「疲れてるとき、えっちすすばるで
元気になるんぞ」

「……さ、みす……いっすすすす」

「わあ……これがおにいちゃんのおちんちん？」

「おつきくて、なんだかビクビクしてるね……」

「えっと、これをペロペロして

あげればいいんだよね？」

「ぞしたら白いのがびゅってするから、

元気になるんだよねっ」

おちんちん

「んんっ……おちんちんって熱いんだね」

「どっどっおにいちゃん気持ちいいっ」

「うん、うん……未衣花ちゃんの話、気持ちいい……」

「よかったあ…」

「上手にえっすすてまておっつてことだよなっ」

「うん……」

（未衣花ちゃん、なにか勘違いしてる…）

…37.0

「でも末衣花ちゃん、すぐくエッチだよ」
「そっちななの？これもそっちななの？」
「そっちなよ。だからさっさと見せてほしいな」
「でも……(´▽｀)おじっちゃんも(´▽｀)ひだよ」

ドキ
ドキ

むにっ



「未衣花ちゃんのあしっこ穴がえっちなんだよ」
「ぞうなんだよ……あ、おちんちんがびくって」
「うん、少し疲れがとれてきたよ」

くほあ……

「ほんとっ……？」

「うん、だから次は足で踏んでほしいな」



「足？足でおちんちんをふむの？」

「ぎゅぎゅ。お願ひ」

「でも、おちんちん痛くない？」

「気持ちいいから大丈夫だよ」

「う、うん……わかった。やってみるねー」

ギョッ



「大丈夫……だよ？おにいちゃんは気持ちいい？」

「うん。ずばるらよ」

「えへへ……なら、へいき」

「だって大好きなおにいちゃんのためだもん！」



(未衣花ちゃん……そんなこと言ってくれるなんて)

「未衣花ちゃん……好きだ!」

「……えっ?」

「未衣花ちゃんのごことが大好きなんだ!」

「……おにいちゃん」

8.1.14



「マイカもね、おにいちゃんのこと大好き！」
「子供だから相手に」

してもらえないと思ってたけど……」

「そんなことはない！大好きだよ！」

「おにいちゃん……」



